第　二　部

自分を見つける作品、
自分らしさで論じる

小　説　論

「笑うサム」から見る文学の可能性

茨木（いばらき）　泰知（たいち）

作者のウィリアム・サロイアンは、"身の周りにいる、ないし、いた、人を、特定されないようにはするが、描"こうとしてきたという。とすれば、この物語の主人公である、laughing Sam も、彼の人生の中で、出会った人の一人なのであろう。そう考えると、この物語は、更に哀しい物語なのだが。

主人公のサムは、自分が不安を感じたり、恐れを感じているときに、ハ、ハ、ハと笑って、その気持ちを取り払おうとする少年である。文面で見ると、ポジティブで明るい少年のように思われるが、物語の描写を見ると、おそらく読者はぞっとするであろう。物語の中で、彼が階段から落ちる場面がある。彼は血を流し、周りにいた人々は彼を助けようと駆け寄る。しかし、彼はハ、ハ、ハと笑って、「階段から落ちた！僕は階段から落ちた！」と言うのだ。その彼の様子が、気味悪く、助けにきた人々は、彼から離れていく。すでにおわかりだろうが、この場面は、彼の異常さ、恐ろしさが全面に出ている。読者は、サムを助けに来た人の中の一人になり、彼の気味悪さにおののくのである。

しかし、同時に我々は、物語が進むにつれて、サムへの憐れみ、サムの悲哀を同時に感じる。サムが、自分の不安や辛さを言葉にできず、ただハ、ハ、ハと笑うことで、なんとか消化しようとしている姿のなんと痛ましいことか。自分の身を守るために"笑う"、その行為が、周りの子どもには、気味悪く映り、彼には、友達が一人もいないのだ。つまり、自分の正直な気持ちを言える人が、一人もいないのである。彼は、母の家計を少しでも助けようと、新聞を売ろうとしている。このような状況では、家庭の中で、自分の不安や辛さは、言えない。直接、このような描写があるわけではないが、彼の苦しみは、容易に想像がつく。

そして、この物語は、サムが主人公だが、語り手はサムを見ていた男の子―サロイアンである。彼のサムの描写は、非常に厳しい。醜悪さの極み、見ただけでも恐ろしくなるようなサムの外見を書き連ねながらも、彼は、サムを、"神の化身のようだ"と描いている。彼は、サムへの嫌悪感、気味悪さをありのままに、遠慮なく書くが、同時に彼への同情、また、畏怖といってもいいような感情も書いている。読者が、サムになんとも言えない悲哀を感じるのも、彼の描写が、読者の気持ちを引っ張り、感情移入させていくのであろう。

サムは物語の終わりで、交通事故で若くして死ぬ。語り手は、それを新聞で知る。おそらく、現実にいたサムも、そのような悲劇的な終わりを告げたのだろう。サムを見て、嫌悪感、気味悪さとともに、哀しさ、彼の助けになってあげたいと思っていたサロイアンは、結局、サムに対して何もできず、サムはこの世を去った。サロイアンは、その後悔、自分への苛立ちをもとに、この作品を書いたのではないかと思う。人は、どんな人間でも、死ぬと、その人の良い側面を見ようとする所があると、僕は思っている。実家にいる時、近所のロうるさいおじいちゃんが死んだ時、生きている時は、ほんとにいつも文句ばっかり言ってきて迷惑！と言っていた人たちが、いざその人が死ぬと、すごい元気やったのにね、とかあんだけ自分を通せる人なかなかいなかったよねとか、迷惑だと感じていた部分が、死んでからはむしろ、良いととらえられていたという経験があり、人は死ぬと、誰でも尊敬されたり、賞賛される部分を、見つけ出すのかもしれないと思った。だから、サロイアンも、サムを

"神の化身"と書いたように、彼を、死後、賞賛とまで言うのは、言い過ぎだろうが、肯定的にとらえ、描いているのではないだろうか。そして、今、生きている、どこかにいる"サム"たちに、私はあなたたちを受け入れます、ありのまま生きてもいいんですと、力強く言ってくれている気がする。

この作品を通して、実感したことがある。文学、いや、形を問わず、芸術は、見えない誰かへの、力強い、心をふるわせる、メッセージになりうるということだ。サムのように、自分の本当の気持ちが言えずに、日々、ごまかして生きている人は、数え切れないほどいるだろう。そういう人たちが、この作品を読んで、自分みたいな人は、どこにでもいる、そして、サロイアンが、サムを受け入れてくれたように、自分のことを、受け入れてくれる人がいると、思えるのと、思えないのとでは、人生に対する展望は明らかに違うであろう。一つの作品が、その人の人生を、大きく変えるとは、よく謳われるが、本当にそうだと思う。芸術は、人を受け入れ、前に進む力、生きていく力を与えるという意義も、大切にしていくべきである。

William Saroyan
"Laughing Sam"

笑うことは良いことなのか
～“LAUGHING　SAM”を読んで～

渡邉（わたなべ）　秀聡（ひでさと）

この短篇小説“Laughing Sam”では語り手が子どもの頃に出会った同世代の少年サムについて描かれている。サムの性格は非常に明るく、いつも笑顔を絶やさない。楽観的であり、辛いことがあっても笑顔で笑い飛ばす。また近年メディアで取り上げられているように、笑いは私たちの健康に効果があるようだ。ストレス解消になったり、ホルモンバランスが整ったり、脳の活性化やガンの予防など笑いにはメリットがある。つまり、笑うことは良いことに思える。

もしもサムのような人が私の周りにいるのなら、きっと彼は人気者になり、みんなのムードメーカーになれるだろう。私は神経質で大人しい性格だと自分では思っている。小説の前半を読んでいて、彼の底抜けに明るい性格が羨ましくてしょうがなかった。辛いことがあっても笑顔で笑い飛ばしてくれる友人が隣に居れば、どれだけ気が楽になるだろうか、心強かっただろうか。

しかし、これには裏があった。彼は自身の悲鳴、悲しみ、恐怖を笑いでカモフラージュさせていた。その恐怖心を笑いで誤魔化すことが、サムの見出した生きる手立てである。小説内には上記のようにサムの笑いには彼なりの理由があることが書かれていた。

これを踏まえると、サムは非常にかわいそうな少年なのだと思われる。喜怒哀楽という言葉があるように人間には様々な感情がある。嬉しい時には喜び、嫌なことをされれば怒り、辛いことには悲しみ、好きなことを楽しむといった人間としての基本的な感情が損なわれている。周りから馬鹿にされようが、いたずらをされようが笑い、死亡事故の出来事に関しても笑う様子が描かれている。（後者は語り手が笑いの中から悲しみの要素に気づき、サム本人も悲しんでいることを認めている。）

笑うことはいいことだとは思うが、何もかもを笑いの中に丸め込んでも良いのだろうか。嬉しい、楽しい、悲しい、腹立たしいなど感じたままの感情を素直に表現する方が豊かな人間になるのではないか。より良い人生が送れるのではないか。冒頭ではサムの性格が羨ましいと述べたが、その程度は私の望むものとは大きく異なる。ではなぜサムは一貫して笑うのか。以下の観点から私の意見を述べたい。

ユダヤ人としてのサム

サムの外見は次のように記されていた。

> 「彼はある種のユダヤ人で、小さく、緊張していた。大きなかぎ鼻、濃い黒い髪、狭い額、肌はニキビだらけで、唇は厚ぼったく、耳は異常なほどおかしな形をしていた。彼は私がそれまでに見た最も醜い少年だった。」

ひどい言われようである。そして私がユダヤ人と聞いて連想する言葉は「迫害」であった。この小説が書かれた年代とユダヤ人が迫害されていた時期は重なる。そうであるならば、サムは迫害を受けていたユダヤ人の象徴なのだろうか。

He wept from the beginning of his life , ten centuries ago・・・・

この“ten centuries ago”はユダヤ人が迫害されてきた歴史を物語っているように思える。そしてサムは自分がユダヤ人であることを自覚しているが故に、余計な衝突を防ぐ目的でいつも笑っていたのかもしれない。

これらのことから私は、サムは周りの人からいたずらをされても笑うだけである状況を、ユダヤ人は他の民族からの迫害を受けても必死に耐えているという内容に結び付けた。小説の語り手は、「どんなに頑張っても、サムを好きになれなかったが、また彼を嫌うこともできなかった」と記している。著者であるウィリアム・サロイアンのユダヤ人に対する意見がこの文に凝縮されていると私は考える。著者はユダヤ人迫害に対して中立的な意見の持ち主なのではないだろうか。

ウィリアム・サロイアンはユダヤ人に対して敵意や軽蔑の念をさほど持っていなかったのではないだろうか。しかし当時のユダヤ人に対する圧倒的な世論に押し負けて本人が思う以上にサム（ユダヤ人）の外見を悪く書き、迫害されて多くのユダヤ人が亡くなっていくかのようにサムも命を落とした。そこにはユダヤ人に対する筆者の親近感や同情が感じ取られた反面、筆者一人の力ではユダヤ人をどうすることもできないという無力感やもどかしさを感じた作品でもあった。

参考文献

『アメリカ短篇小説の伝統と繁栄 －二十世紀作品論－』 99-105 項
ユダヤ人の迫害
http://benedict.co.jp/smalltalk/talk-60/

虐げられるものの放つ、面妖な美しさ「笑うサム」

伊藤　博明

英文で小説を読む機会は今までに中々なく、大変ではあったが新鮮で面白かった。ウィリアム・サロイアンが伝えようとしたものは何なのか？それは一つに絞って「これだ！」といえるようなものではなさそうなのだが、あくまで一読者の視点として一つ挙げてみたい。

僕がこの作品を読み終えて強く印象に残ったことは、「虐げられるものの放つ面妖な美しさ」である。

この小説の語り手である、サムと同じ新聞売りの少年によって主人公であるサムはこれでもかというくらいに細かい外見の描写がなされる。彼はユダヤ人の血が入っており、背は低くかっちりとしている。鼻は大きく、髪の毛はこんもりとして黒く、額は広くない。顔はニキビだらけ、唇は厚く、普通ではない馬鹿げた見た目の耳をしている。彼の腕は短い、彼の指はずんぐりしている。なで肩で、さらに足がとにかく大きい…と事細かに彼の外見を述べている。それほど語り手に取って彼は異形であり、彼の目を引いたのであろうことがこの描写から窺える。

更に彼は外見だけでなく、悲しい時にはそれを紛らわすためにゲラゲラと笑ってしまうという一見他人には理解しがたいクセも持ち合わせている。そのクセは語り手をはじめ多くの人間からも反感を買ってしまっている。

しかし、彼は同時にサムに対してある種の侵しがたい神聖さのようなものも感じたようだ。我々にも似たような経験があるだろう。異質なものに対する畏怖の感情を抱くという経験である。例えば幽霊やマグリットの絵画、言葉の通じない外国人などなど。異質なもの、つまりこれまでの自身の経験ないし常識では処理できない事象に対する嫌悪感は、それに対する畏怖と紙一重だ。人間は得てして出会ったことのないものに対してはまず警戒する。多くの人々はそこでその異質なものから逃走を図るか、逆に攻撃をしかけて排除しようとする。しかし中には好奇心に負けてそのものに近づこうとするものがいる。語り手の少年はまさにこの好奇心に負けたものの一人だ。先に挙げた例の中にもあるように芸術作品においても似たようなことは頻繁に起こる。得てしてエポックメイキングな芸術作品は発表当初は多くの人間によって悪態をつかれる。しかしそこで悪態をついて逃避を図らなかった人間がやがてその作品の価値を見出すのだ。語り手の少年にとってサムは友人や家族のような一人の人格のある、理解できる範疇にある人間ではなく、もっとこう、何か抽象的で捉えがたいものを結晶化した、総体としての何かに見えていたのだと思う。実際文章中でも“Seeing him for the first time, one felt: Here is man”とその印象を物語っている。

しかしサムはただ異形なだけではなく、周囲の人間からもひどく虐げられている。このことは語り手の少年が状況を客観視した大きな要因のひとつになっていると同時に、サムに美しさを与える要因ともなっている。我々は他者がそのまた他者を虐げられているのを見るとひどく白けて自分を客観視してしまうし、虐げられているものに対して憐憫や同情の念も抱くこともある（中には義憤に燃える人もいるだろう）。路地裏で、雨に打たれる捨てられた子猫は“絵”になる。戦争で親を亡くした子供はしばしばカメラマンによって切り抜かれる。しかしサムは異形なのだ。気持ちを向けようにも未だ出会ったことのない存在なのだからどう扱えばいいのか分からない。それゆえに対象の輪郭はぼや

けてしまい、上に引用したような抽象的な見方をすることになったのだろうと思う。しかし虐げられたものの放つ美しさは止めどなく溢れだしている。そんな彼の奇妙な美しさが作者の脳裏にはひどく焼き付いて離れなかったのではないか。移民問題の与える影響、当時の生活の環境、などなどあると思うが、これが作者にとって誰かに打ち明けたかったことの一つであろうと思った。

しかし終盤になると語り手の少年はサムが理解しがたいものではなく、自分たちと同じように悲しみ、傷つく一人の人間であることに気付く。これまで語り手視点でしか描写されて来なかった（つまりはすべて語り手のイメージであった）サムの心情が彼自身によって語られるのだ。こうして彼のまとっていたベールは良い悪いに関わらず吹き飛ばされ、読者にカタルシスを与えると同時にその神秘性はどこか遠くへと打ち遣られてしまう。彼は“路地裏で雨に打たれる捨て猫”に、あるいは“戦争で親を亡くした子供”になったのだ。面妖な美しさも皮を一枚剥いでしまえば我々のよく知るものに変わりはない、とでもいうかのように。語り手の少年の未知なるものに対する好奇心はここでついに潰える。“That’s all I want to know.”と彼は言った。それ以後もサムの動向を彼は語るが、それまでに比べて幾分淡々としたものであるように思う。物語は終始悲壮感に満ちているが、それはジメジメしたものではなく、どこか遠くのことを語るような、乾いたもののように僕は感じた。

「永遠への長い散歩」
～キャサリンの戸惑い～

瀬川　　愛

「戸惑えば戸惑うほど、それは愛しているということ」これは米国の女性作家、アリス・ウォーカーの名言である。この言葉を念頭に「永遠への長い散歩」を読み進めていくと、よりキャサリンの心の動きに共感できるのではないだろうか。

結婚式１週間前のキャサリンの元に訪れ、彼女を散歩に誘うニュート。それも AWOL（無断外出）でやってきたのだからキャサリンは戸惑いを隠せない。そしてニュートは早々と彼女に愛を告げるのである。この時に彼に何か策略があったのか、衝動的に放った言葉なのかはわからないが、彼は終始落ち着いた様子である。猛烈に彼を捉えて離さない事柄が今まさに動き出そうとしているこの瞬間さえも。一方の彼女は彼とは対照的に戸惑い続け、時に怒りを見せながらも女は愛を隠せないと気づき愕然とする。その愛の対象は１週間後に結婚するヘンリー・スチュワート・チェイスンズではなく、１年近く会っておらず今まで一度も愛を確かめ合ったことのないニュート。絶妙なタイミングのキスに彼女は戸惑いの中の幸せを見つける。なんと非常識で非現実的な出来事なのだと呆れる読者もいるかもしれないが、二人の距離と独特な雰囲気になぜか目が離せない。そして散歩は続き、別れはあっさりと忘却されてしまう。ニュートが眠っていた１時間、キャサリンにとってはどれくらいの長さだったのだろうか。時間とはツンとしていて勝手なものである。退屈な時は恨むほどゆっくりと流れ、幸せな時はあっさりと過ぎ去ってしまう。しかしキャサリンがニュートへの愛を確かめるには充分であった。最後の別れ際、きっとキャサリンの頭の中に１週間後の婚約者の姿など存在しない。大きな願いと小さな期待を込めて見つめるニュートの背中。そして最後は彼女の期待通りの展開、何とも甘ったるい最後となる。しかしこの展開に胸をなでおろした読者は私だけではないはずだ。

すべてのストーリーをみても、キャサリンには何度も散歩をやめるタイミングがあった。そもそも彼女の元を訪れたニュートを玄関で追い返すことさえできた。しかしキャサリンは戸惑いながらもニュートのペースに流れていったのだ。戸惑い戸惑い、彼を愛していったのだ。そして読者もまた、物語の展開に戸惑いながらもこの作品を愛していくのである。

Newt Catherine

Could you Come fora walk?

「永遠への長い散歩」を読んで

渋谷（しぶや）　理子（さとこ）

小説「永遠への長い散歩」は幼馴染の男女の再会のシーンから始まる。男の子の名はニュートといい、軍隊にいる兵士。女の子の名はキャサリンといい、一週間後に結婚式を控えている。二人はともに20才である。再会といっても、ニュートがキャサリンのもとを突然訪れ、驚くキャサリンに「歩かない？」と誘い出す状況だ。冒頭のほんの数行にあたるこのシーンで読者はニュートの気持ちを読み取る。私は、彼はきっとキャサリンに対する自分の気持ちに気付き、しかし結婚前の彼女にもうどうしようもできない、でも会いたい…、と複雑な感情を抱いているはずだと思った。そして、ここから彼のもどかしい心の様子が描かれるものだと思っていた。ところが、軍隊を無断で抜けだしてきたわけを聞くキャサリンに対し、ニュートは、「君に会いに来た。君を愛しているからだよ」とストレートに愛の告白をする。あまりに早く気持ちを打ち明ける展開に多くの読者は驚き、物語に引き込まれるに違いない。そして単にニュートの気持ちを読み取ろうとするだけでなく、突然の告白に困惑するキャサリンの心境にも関心を抱くようになる。

さて、ここから散歩を始める二人だが、キャサリンは動揺を隠せない。言葉ではニュートを突き放そうとするが、しかし、一歩一歩踏み出す足は止まらない。彼女にとってもニュートは大切な存在だったのだ。当惑するキャサリンに自分への愛を知ったニュートは彼女に口づける。そしてまたキャサリンはニュートを突き放す。互いの状況と複雑な気持ちが、二人の関係の進展を邪魔する。やがてリンゴの木の前にたどりつき、静かに眠る二人はまるで、なにもかも捨てて、自然の中で二人だけの世界にいるかのように、私は感じた。

ついに別れの時が来ると、キャサリンの気持ちは完全にニュートに傾いていた。歩き出すニュートが立ち止り、振り返り、自分の名を呼んだら…、と考えるキャサリン。その通りのことをするニュート。駆け出し抱き着くキャサリン。二人の気持ちが一致した瞬間、物語は終わる。

ハッピーエンドのラブストーリーだった、と言ってしまえば簡単だが、この物語はどこかほかのラブストーリーと異なっていた。そして多くの人々を惹きつける名作となっている。なぜだろうか。

第一に、読者がニュートもしくはキャサリンに感情移入しやすいという点だ。このような切迫した状況で自分ならどうするだろうか、と考えさせる作品である。幼馴染がいる人、初恋の淡い思い出がある人、大切な人に気持ちを伝えられないままでいる人、何らかの形で自分自身の恋愛と重ねてしまう人も多いはずだ。

第二に、登場人物や情景がシンプルな点。この作品はニュート、キャサリン、キャサリンの婚約者、主にこの三人で構成されている。しかも実際に登場するのはニュートとキャサリンのみである。読者は二人の心の動きをとらえることに集中できる。また、情景も都会から離れた豊かな自然の中を散歩する、というシンプルなもので、ニュートとキャサリンの邪魔をしない。

第三に、二人の気持ちを表すような音の表現。これはリンゴの木の下で眠る場面にみられる。言い合いの場面と変わって二人が目を閉じて静かな世界が始まるからこそ目立つ音だ。ミツバチがブンブン言ったり、自動車のエンジンをかけて失敗する音がしたり、複雑な心の様子を描いている。

このように、この作品は読者の想像力を掻き立てる魅力的な要素を多く持つ。そして、読者によっ

てさまざまなとらえ方、物語と自分との重ね方などを生み出す。同じ人が読んでも年齢やその時の状況によって感じ方は変わるだろう。さまざまな感情を抱かせるこの作品をまたいつか、何年後かにもう一度読みたいと思う。そしてその時の私はこのハッピーエンドをどうとらえるのか楽しみになった。

草食系男子が放つ逆転サヨナラホームラン
～“Long Walk to Forever”を読んで～

渡邉（わたなべ）　秀聡（ひでさと）

この小説の登場人物は幼なじみの男女、男性はニュートで女性はキャサリンとキャサリンの婚約者ヘンリーである。物語は短い会話を軸に進められていたために、内容にのめり込んだ読み手が多かったのではないかと思う。ニュートは近年よく言われるようになった恋愛に対して淡白で受け身な草食系男子である。そんなニュートがヘンリーと既に婚約していた幼なじみキャサリンを自分のもとに引き寄せるというサクセスストーリーである。途中でヘンリーは登場しないと勘づき、ニュートとキャサリンは惹かれあうのではないかと予想が立って、実際その通りになった。しかし野球経験者の私に言わせれば、これは見事な逆転サヨナラホームランである。そのためタイトルもこのように反映させた。他の人が見れば物語の最初からゲームセット（試合終了）だったかもしれない。以下では小説を読んだ私の感想を述べたい。

ニュートに感情移入

ニュートのことについて書かれている一文に内気とある。またニュートとキャサリンは幼なじみで二人の間に心地よい温もりがあっても恋愛のことは話さなかったと書かれている。そんなニュートについての描写は、そっくりそのまま私のことを言っているのではないかと感じ、思わず親近感が湧いてしまった。私は彼の味方になって最後まで読み通した。キャサリンに好きだと言い出せずに軍隊へ行ってしまったが、何とかなる・キャサリンはいずれ自分と結婚するとニュートは思っていたのかもしれない。キャサリンが婚約した事実を知った彼は居ても立っても居られなくなり、飛んで帰ってきたのだろう。

キャサリンを外に連れ出すことに成功したニュートは最初で最後の賭けに出る。軍隊を抜け出して来た身の上を話してキャサリンに呆れられる。そして告白する。彼女は何が何だか分からなかっただろう。愛想をつかれて何度もキャサリンに帰られそうになる。だがそれはニュートにとって終わりを意味する。足を止めるわけにはいかない。小説のタイトル通り“Long Walk”し続けて粘り強く機会を待ち続けねばならない。不屈の闘志で告白し続けるニュートを応援しながら私は読んでいた。

ヘンリーの気持ち

婚約者ヘンリーの視点に立てば、ニュートの逆転劇は寝耳に水であろう。ニュートンが手に入れた光の分だけ、彼は闇を見ることになる。読み手によっては略奪と解釈できなくもない。ヘンリーはかわいそうな男なのだろうか。小説では筆者の配慮によって、彼の登場回数は必要最低限に抑えられていると私は考える。筆者は意図的にニュートとキャサリンに目を向けさせて、読者にヘンリーを忘れさせている。さらに、この小説ではニュートとキャサリンが結ばれる瞬間で完結している。あえて彼の闇を書かないというカート・ヴォネガット本人の優しさではないだろうか。

数少ない名称も何かの比喩ではないか

冒頭で述べたように物語は主に会話で進められるが、いくつか物体（名称）が出でくる。ここではそれらの物語における役割について私の考えをまとめる。

一度目にニュートがキャサリンに告白したとき、彼らは茶色い落ち葉（blown leaf）の上にいた。なぜ茶色い落ち葉と言う必要があったのか。私は茶色い落ち葉＝可能性がないものと捉えて、ニュートに振り向く余地がないことを暗示していると考えた。

無限に続く森の並木（the infinite colonnade of the woods）はキャサリンが握手をして別れようとしたがニュートがまた告白した場面だった。これはニュートの愛が永遠であることと、彼女がイエスと言うまで何度でも告白し続けるという気持ちの表れではないか。

ニュートがキャサリンに何度かキスした後、二人は果樹園 (orchard) に着いた。先ほどの茶色い落ち葉に比べれば二人の愛は実を結びそうではないか。

すぐさま 盲学校 （school for the blind）の鐘が鳴る。なぜ学校ではなく盲学校なのか。それは今のキャサリンにはヘンリーのことなど見えないからだ。

次に リンゴの木 （an apple tree）が出てくる。リンゴの花言葉は「選ばれた恋」「選択」「永久の幸せ」である。キャサリンにニュートを選べと言わんばかりである。そして果樹園とリンゴの木を使い分けていることにも気づく。

かかり損なっている自動車のエンジン音 は、ニュートの所へ走って行きたいが、最後の踏ん切りがつかないキャサリンを表している。

これらのことから私は上記に挙げた名称は、その時々のキャサリンの心理状況を反映しているのではないかと考える。短編小説ということもあり、内容が単調だと感じた読み手がいるかもしれない。だが、豪快なホームランの中にもこのように繊細な比喩が隠されているのではないか。

「羽根」　幸せの基準

水嶋　香織

この作品を読んで感じたのは、おそらく読者のほとんどが思うことだろうが、他人の幸せを真似しても自分は本当に幸せにはなれないということだ。幸せの基準が違う２組の夫婦の出会いが一方の夫婦を一気に変えてしまうという話だが、この２組は本当に根本的に異なる夫婦だと感じた。ジャックとフランは２人の時間、例えば旅行や車にお金をかけたりすることを楽しみとして生きていこうとしていた。それに対し、バドとオーラには子どもがおり、子どもと過ごす時間を大切にしていた。ジャック、フラン夫妻はバド、オーラ夫妻に出会ってから子どもがほしいという考えに変わり、子どもを産んだがその後の生活はうまくいかなかった。

子どもに対する表現

バド、オーラ夫妻と会った日にフランがこの夫婦の子どもを「それは何と言おうと、これまで私が見たうちで一番不細工な赤ん坊だった。あまりにも醜いので、私は口をきくこともできなかった。」などと、子どもに対して悪い表現を多く並べている。普通ならば他人の子どもであっても、赤ん坊を「醜い」「かわいくない」などと否定的な言葉を使って表現するだろうかと思った。これは子どもを持って幸せそうにしているバド、オーラ夫妻への嫉妬を含んでいると表現したかったのだろうと私は思った。様々な言葉、会話の裏にはその人の本当の思いが含まれていることがよくある。この言葉たちの中には、バド、オーラ夫妻への嫉妬、うらやましさが含まれていると思う。「子どもなどいらない」と考えているからこそ、子どもに対してマイナスの感情を持たなければならないという気持ちが、無意識的にフランの中で浮かびあがったようにこの場面では感じられた。それにしてもいくら顔がかわいくないからと言って、ひどい表現ばかり並べられすぎていて、単にかわいそうになる場面でもあった。

心情の変化、フランの性格

この日を境にフランは子どもがほしくなったのだが、私はフランがとても単純な女性だと感じた。それまで「子どもはいらない。」と言っていた女性が、子どもと楽しそうに暮らす夫婦を一組見ただけで子どもが欲しくなるということが単純に思えた。

この場面以外でもフランは単純な女性だと思わせる部分がある。ジャックに「その髪にすっかり参っている。」、「君に惚れているのはその髪のせいだ。」、「髪を切ってしまえば君のことを愛さなくなるかもしれない。」と言われていた場面だ。工場の仕事の時に邪魔でうっとうしくても切ろうとはしない。単純という言葉で片づけていいものかは定かではないが、人に合わしたり、影響されたりする部分がフランには多いように感じられる。

私も人に影響されたり合わせることが多いので気持ちは良く分かる。自分が嫌われたくない相手にこうして、ああしてと言われるとそれに合わしてしまうし、「次はこうしよう。」と言われると言われ

たように動いてしまう。他人と衝突して争いを引き起こさないという点では良い部分だと言えるかもしれないが、自分の意見を言えない、芯のない人間であることに違いはない。良い部分でもあり、悪い部分でもあると思っている。

そういう性格だから、フランは他人の幸せは自分の幸せだと思ってしまったのではないかと思った。結末からしておそらくジャックとフランは子どもができていなかった方が二人で仲睦まじく暮らしていたのだと思う。人生にかかわることなのだから、もう少し二人で話し合って真剣に決定すべきことだったように思える。子どもはかわいいけれどこの二人にとっては仲が悪くなる原因となってしまった。バド、オーラ夫妻のようにはなれなかったのである。

自分にとって何が幸せか

この作品によって自分にとって何が幸せか、どうすれば幸せになれるかを考えさせられた。その部分では「アバウトタイム」を観た後に考えたことと少し似ているように感じられた。今、私を含めて、多くの人は当たり前のように学校に行き、家に帰り、ご飯を食べたりテレビを観たり好きなことをするという生活を送っている。その中で少しでも嫌なことがあれば文句を言うときもあれば、機嫌が悪くなってしまったりしてしまうこともある。今の自分の状況が当たり前だと思い、自分がどれだけ幸せで、どれだけ恵まれているか分かっていないからだ。日本の中でも、また、世界に目を向けても、毎日ご飯が食べられない人も学校に通えない人もいれば、自分の思ったように体が思うように動かない人もいる。その人たちにとってみれば私たちが今当たり前にしていることが出来たら「幸せだ。」と感じるに違いない。

この作品を読むことは「自分にとって幸せとは何か」を考えるきっかけになるような気がする。また、そう考えることで当たり前のことが出来ていることに感謝することが出来るように思える。今が当たり前だと思っている多くの人に読んでもらいたい作品だと思った。

FEATHERS
～あなたの幸せのかたちとは～

中村　綾香

この作品はある二組の夫婦（鳥や赤ん坊は出てきますが）しか登場しません。そして家に向かうシーン、食事をするシーン、二組の夫婦生活のその後のシーン、といったようにごくありふれた日常を切り取った決して数も多くはない描写のように思われます。構成の点だけで見れば、こんなにも単純な面白くない題材はあるか？！と感じます。実際に読んでいても初めは何が言いたいんだろうかとよくわからないまま読み進めていました。

しかし、なんでもない描写に見えるものにも注目し、なぜ二組の夫婦を登場させているのかという疑問を持って読むうちに、価値観の相違や幸せへの追求の違いが面白いほど文章に盛り込まれているように感じました。

例えばジャックは、“I tell her I fell in love with her because of her hair. I might stop loving her if she cut it.”「俺が彼女に惚れ込んでいるのはその金髪のせいだよ、それを切ってしまったら愛せなくなるかもしれないな。」と言っている。対して、バド夫妻の家の中に歯並びの悪い石膏の歯型を飾っていた。バドは飾りとしてふさわしいとは思っていないものの、オーラの大切にしているものとして受け入れている。

また本文中でジャックのコメントから彼らの息子は驚くほど醜いと描写されている。ジャックは綺麗なものを宝と考えているが、バドやオーラは醜くても思い出の詰まったものや二人の愛の結晶といえる子を大切だと考えている。視覚的な面ではジャックはスラックスに半袖のスポーツシャツ、よそいきのローファーで、一方バドはブルージーンズとデニムのシャツでいつもの仕事着だった。両妻の服装は描かれていないが夫と同じような格好をしているはずだ。

この描写からも、二組の夫婦は何か根本的に違う考えがあるということの伏線が張られているのだと考えます。対立的に登場人物を捉えて読み進めていくとだんだん面白くなってきて、この晩餐を境にもっといえば、赤ん坊を実際に目の当たりにした瞬間から、ジャックとフランの価値観も変わっていることが明らかにわかりました。ジャックの同僚の家にフランもついてきてほしいと、初めは渋々向かうことになり到着してからも気乗りしない風だった。赤ん坊の声が聞こえてきてフランの興味はそこに向き、赤ん坊をみたいと切望する。やっとリビングに連れてこられてお目に書かれたフランは可愛いとはお世辞にも言えない赤ん坊に魅了されます。赤ん坊をみたジャックは赤ん坊に対して極めて冷静に酷評します。ここでジャック夫婦間の価値観の違いも生まれてしまいます。

ここで面白いと感じたのは、初めはテンションが低かったフランと、それなりの気分が良かったジャックの気持ちが逆転したということです。そしてフランをここに連れて来たばっかりに今後の人生のプランまで激動してしまいます。女性は子供を望むことが多いだろうし、きっかけということがあれば価値観だってすぐに変わり得るのだという風に感じました。

そしてもう一つ言及したいのは「羽根」の意味についてです。この羽根は孔雀のものですが、孔雀が登場するシーンに着目しました。初めに現れた時には孔雀はジャック夫婦に敵意をむき出しているように感じました。家に入る時フランに身体を押し付けたという描写も、二人は鳥に嫌悪感を抱いているのにさらにひっついてきたと描くことでさらなる悪いことの前兆を暗示しているのだと思いまし

た。そして次の登場は食事を終えたところです。少しずつフランの心情に変化が訪れる予兆の時に孔雀が登場しているのかなと感じました。それは今まで会話を始めることはなかったフランが、少しずつオーラに心を寄せていく描写なのだろうと思います。

孔雀はオーラが飼いたくてバドは探し求めたが、バド自体は孔雀を好意的には捉えていないが妻が幸せならそれで良いと寛容な心持ちで幸せに暮らしています。これに対して子供ができたジャックは、子供が欲しかったフランを受け入れることが出来ず、髪を切りどんどん魅力を失ってしまい、幸せも感じることが出来なくなってしまいました。同じ状況が起こっているのに、二組の間ではそれが幸と不幸の分岐点になっているのが実に面白いと思いました。人の価値観というのはそれぞれで幸せの感じ方は本当に多種多様であるということを物語を通して学びました。そして、真似をすることが必ずしも自分にとっても幸せになるとは限らないんだなあと思いました。

羽根は帰り際に渡されるのですが、この羽根はバド夫婦にとっては幸運などを意味していても、ジャック夫婦にとっては悲劇の始まりの目印に過ぎないのです。

そして孔雀のジョーイは結末では死んでしまっていて、ジャックたちにとって羽根はやはりあまり良いものではなかったのだなという確信を得ました。

価値観の違いや象徴的なもの（今回なら孔雀）に注視して読み進めていくのは私にとって斬新な読み方でしたが、物事の関係性に気づくことも多く楽しかったです。ここで学んだのは価値観は押し付けてはいけないという教訓でした。

JACK－FRAN

Bud and Olla

Raymond Carver's "Feathers"

「羽根」本当の幸せは何か

手塚　力也

この物語は、主人公ジャックとその妻であるフランがジャックの同僚であるバドの家に食事に招待されるというありふれた日常の一コマが淡々と描かれている作品であり、一見すると何の変哲もないものであるが、読み解いてみると２組の夫婦にはそれぞれ面白い特徴があるように思う。また、タイトルにもなっている「羽根」が物語の中でどういう役割をもっているのかを考えてみる。

２組の夫婦の愛の象徴

まずは、２組の夫婦が何を重要視しているかから見てみる。まずジャックとフランであるが、この夫婦は２人だけの時間を大切にしており、共働きをしている中、その収入をカナダ旅行などの２人の夢に使おうと考えている。そんな２人にとって、２人の時間を阻害することになりかねない子供は欲しくないものに挙げられている。一方でバドとオーラは、子供をもうけており、作中に描かれている通り、不細工であっても愛を注ぎ、決して２人の愛を阻害するものではなく、むしろ愛の結晶ともいえるものとして捉えている。

このように子供の見方・捉え方が違う２組の夫婦であるが、作中で描かれているそれぞれの愛の象徴にも違いが表れている。ジャックとフランの夫婦における愛の象徴として挙げられるものは間違いなく妻であるフランの美しく長いブロンドの髪であろう。ジャックはフランのその髪に惚れており、「君に惚れているのはその髪があるから」と言うほどで、また「その髪を切ってしまうようなことがあれば君を愛さなくなるかもしれない」とまで言っている。フランのほうもそれを承知しており、仕事をする中でどれだけその髪が邪魔であろうとも切ることはない。それに対して、バドとオーラの夫婦は、子供はもちろんだが、歯が愛の象徴として挙げられるであろう。バドの妻であるオーラは生来歯並びが悪かったが、家が貧乏であったため歯並びの矯正をすることができなかった。しかしバドと出会うことで、矯正治療を行い今では美しい歯並びを手に入れている。そしてその矯正治療の際にとった矯正前の歯形を大切そうに飾っている。この髪と歯の対比から見えてくるものがある。髪は一目で確認できるものであるのに対して、歯は見ようと思わなければ、目に留まらないものであるということだ。ここから、ジャックとフランの夫婦は明確な形あるものに愛を考える節があり、バドとオーラの夫婦は明確なものはもちろんだが、それ以上にそれに付随する行為や思い出こそが愛の象徴であると捉えているのではないかと思う。

「羽根」の意味

さて、この物語のタイトルにもなっている「羽根」だが、これにかかわるものはバドとオーラの夫婦が飼っている孔雀のジョーイと食事の帰りに渡される孔雀の羽根の２つが挙げられるが、どちらも物語の本筋には関係なく、ずれているように感じる。しかし、あえて解釈するなら、孔雀のジョーイはバドとオーラの夫婦における、子供、歯に次ぐ３つめの愛の象徴であると考えられるのではないだ

ろうか。また、食事の帰り際に渡された孔雀の羽根は、バドとオーラの夫婦の愛の形の一部がジャックとフランの夫婦のもとへと移ったことへの暗示となっているのではないだろうか。その実、バドはオーラとの結婚後、オーラの孔雀を飼いたいという願いに笑いながらも、孔雀を手に入れるために奔走し、100 ドルもの大金を払ってまで手に入れているのであるし、ジャックとフランの夫婦のほうでは、食事から帰ったその日に妻であるフランは子供を求めており、実際に子供が出来てからは妻のフランは髪を切ってしまい、仕事も辞めてしまった。

本当の幸せの形

この物語が表現したかったのは、愛の形、ひいては幸せの形についてではなかろうかと思う。ジャックの妻であるフランは、もともとは夫であるジャックと同様に子供は２人の時間を阻害するものとしており、欲しくないものととらえていたが、食事会の際にバドとオーラの夫婦の愛に触れ、その子供であるハロルドを目にすることで、自らの夫婦の間にもそのような愛が欲しいと感じるようになった。しかし、子供をもうけたことによって、ジャックとフランにとっての愛の形であった２人だけの時間は無くなってしまい、愛の象徴でもあったフランの長いブロンドの髪も切られてしまう。その結果、家族の関係は冷めたものになってしまった。

人それぞれ理想とする愛や幸せの形があり、それを逸脱したり、他人のまねごとをしてしまうとその人にとっての本当の愛や幸せはなくなってしまうのであろう。

一晩の出来事が変えた人生

戸田　光（ひかる）

初めこの物語「羽根」（“Feathers”）を読んだとき、率直な感想として、フランとジャックの態度に腹が立った。バドはジャックの友達であり、さらにオーラとジャックは二人をもてなしていたにも関わらず、フランはその奥さんであるオーラと子供を馬鹿にしたような態度ばかりとっていたからだ。この女は何様だと思うほど彼女の発言は目に余るものであった。

しかし、最後に二人は、バドとオーラに様々なことを学び、今までとは全く別の考えを持つことができた。私としては、あんなにも馬鹿にしていたのに…と少し腑に落ちない部分があるのだが。

バドの家に招待されるまで二人は、自分たちの間に子供はいらないと言っていた。しかし、家を訪れ、彼らは様々なものを目にした。まずは孔雀である。その孔雀の存在は二人に衝撃を与えた。あっけにとられた二人は動くことができなかった。オーラの登場のたびに彼女の頬の赤さについて書かれていた。そしてフランとジャックは興味のないテレビを見ながら飲み物や料理が出てくるのを待っていた。その間に二人は古い焼き石膏の歯型を見つけた。その歯型はとてもぐしゃぐしゃな並びの悪い歯型であった。二人はそれをとても気味悪がった。そこでバドがフランの歯型への視線に気がついた。その歯型の正体は、かつて歯の矯正をする前のオーラの歯型であった。なぜそんなものをここに飾っているのか不思議に思っていると、オーラが、その歯型を見るとバドが自分にどれだけ良くしてくれたかを思い出すのだ、と言った。オーラは小さいころ、歯並びがとても悪かったが、親が貧乏で治すお金が無く、前の亭主はオーラの見かけなど全く気にかけなかったようだ。

しかし、バドは泥沼にいたオーラを助けてくれた。結婚し、すぐにその歯を治そうと言って、矯正を始めることができた。そんな彼女のコンプレックスを治し、自信の無い素振りを見せるとバドはそういうのはもうよせ、と励ましの言葉をくれた。私は、オーラにとってバドは本当に太陽のような存在だと思った。ずっと抱えていた悩みをすぐに解決してくれ、さらには自信まで与えてくれるような人は中々いないと思うし、オーラはラッキーである。

その後彼らは、食事を楽しんだ。すると、フランとジャックが最初に見た孔雀が外で暴れだし、バドは文句を言っていた。しかし、その孔雀は、オーラが昔から孔雀を飼うことが夢だったということで、バドが孔雀を探し回って大金を払って買ってきたのである。これもまた、バドはたいへんオーラに尽くす男だと感じる部分である。

しかし、それほどバドはオーラを愛しているということが伝わってくる。すると次は、赤ん坊が泣き出したので、赤ん坊をリビングに連れてきた。その赤ん坊を見たとき、フランとジャックは思わず息を飲んだ。なぜなら、その赤ちゃんは二人が今まで見たなかで最も不細工であったからである。あまりにも醜いために、二人は言葉すらも出ずにいた。この描写もなんともひどいものである。他人の赤ちゃんをそこまで不細工といえるのか。本当にバドとジャックの間に交友関係はあるのか？と疑ってしまうほどである。

しかし、二人のそんな思いも関係なく、バドとオーラはハロルドをあやし、愛でているようだった。しかし、フランに心境の変化があったのか、彼女はハロルドを抱きあやし始めた、夢中になるほど。そして孔雀も家に入ってきて、孔雀とハロルドはいつものようにじゃれあいだした。バドとオー

ラはハロルドの容姿に関しては本当に何も気にしていない。もし気にしていたとしても、まあいいや、不細工なら不細工でいいじゃないか、というくらいの気だったかもしれない。ハロルドは自分たちの子供だ。それにこれはひとつの段階にすぎず、もうすぐまた次の段階がやってくるのだ。先のことは先のこと。あれこれといろんな段階をとおりすぎてしまえば、物事は結局、落ち着くべきところに落ち着くのだ。と考えているのだろう、とジャックは思った。

この小説は全部ジャック目線で書かれているが、最初の段階ではこんな考え方などしなかっただろうジャックが、彼らはそういう風に思っているのかもしれない、と自分とは違った目線で物事を考えることができていることが私にとって驚きであった。そのバドとオーラの家での夜は、フランとジャックにとってかけがえのないものだった。二人の考えが 180 度変化したと言っても良いほどに、彼らは人生のあらゆるものに心地の良さを感じていた。

その後、二人は子供を産んだ。ジャックが愛していたフランの長い髪の毛もばっさりと切られ、彼女はぶくぶくと太ってしまった。このことについて、二人は何も言わず、バドの家の出来事を思い返して、「あれが物事の変わり目だった」と話すのだ。フランは相変わらず、バドとオーラの一家をけなすようなことを言う。しかし、その出会いが彼らを変えたのだ。その変化は彼らにとって良かったのか、悪かったのか、はわからないが、確実に言えることは、二人はその夜に、ありのままに生きていくことを自然と無意識に学んだのである。

“Feathers”
～二人の妻の変化～

奥野　杏樹（あんじゅ）

私はこの”Feathers”という小説の中でフラン (Fran) とオーラ (Olla) という考えや生活、容姿まで対照的なふたりに注目した。このふたり、特にフランはこの短篇小説の中で様々な面においてどんどん変化していく。堕落と呼べるまでの変化を見せたフランに何があったのだろうか。

バドの妻オーラ

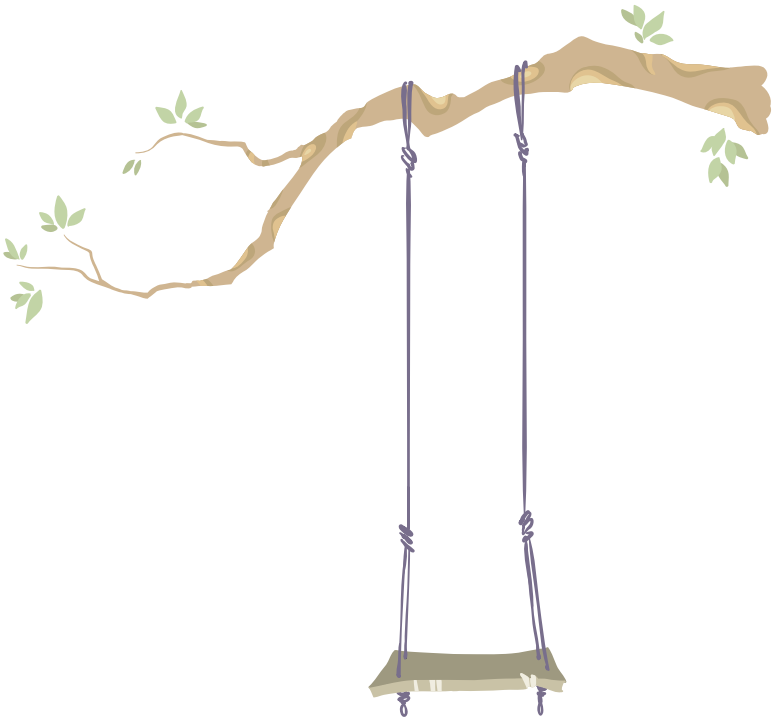
最初にバドの妻のオーラの登場シーンからだ。髪を束ねた背の低いぽっちゃりした女。頬は真っ赤に染まっている。その彼女は息を切らせているのか、または何かにひどく怒っているのではないかとジャックに思われるほど顔を赤くしていた。“This plump little woman with her hair done up in a bun was waiting for us in the living room.” “The cheeks of her face were bright red. I thought at first she might be out of breath, or else mad at something.”(339) これがオーラの第一印象であった。ここで主人公のジャックも気になっていたようにオーラはこの後もたびたび顔を赤くする描写がある。特にフランと話しているときにそのようになることが多いように思った。しかし、バドとオーラの赤ん坊が話に登場してからオーラの顔が赤くなるという描写は一度だけ。“Olla looked at Fran and then she liked at me. Her face had gone red again.”(350) どちらにせよ、オーラはフランと接しているときに顔を赤くしている。オーラが顔を赤くするのはただシャイなせいだけなのかそれとも自分と正反対のフランに対して一種の嫉妬とも取れる何かを感じているからなのかはわからない。

ジャックの妻フラン

ジャックの妻のフランはその容姿の描写や言動からおしゃれで洗練された生活をしているような雰囲気がうかがえる。“Fran’s a big tall drink of water. She has this blond hair that hangs down her back.”(333) “Some bights we went to a movie. Other nights we just stayed in and watched TV. Sometimes Fran baked things for me and we’d eat whatever it was all in a sitting.”(334) 長い髪はたらされたままであるし、お菓子を焼いて食べるなどまさに自由な生活を謳歌している。そしてフランの性格に最初に感じたことは冷たい人間だなと思った。もっと言うならばあまり良い性格はしていないとまで思った。夫の友人の家に遊びに行くというのに手土産を何にするかにとても無関心であるし、相手方の家の料理も見てもいないのに批判している。しかし、最初こそ乗り気でなかったフランはバドの家に行くとどんどん変化していく。着いたばかりのころはいらいらした様子を見せていたが一歩バドの家に入ると“You have a nice place,’ she said.”(338) と突然褒め始める。フランは突然何を感じて変化したのかと思った。その後もバドの家でテレビを見たり、バドの妻オーラと話をしたりしている様子を見ると最初に乗り気でなかった様子はあまり見られなくなっていたように思う。オーラののろけ話に対しても嫌な顔をするようなそぶりはない。そして決定的なのが、赤ん坊を見たいと言ってからだ。一番ほしくないものが子供と言っていたのに何度も子供が見たいと言い出した心

情の突然の変化はどこから来たのだろうか。わたしはジャックと同じように驚かずにはいられなかった。そして赤ちゃんを見ることができてからのフランの様子も最初にフランに抱いた印象とはかなり違うものになっていた。赤ちゃんをかわいいと思うほどの感情（しかも、バドとオーラの赤ちゃんはかなり不細工なはずなのに）を持っていたんだなと思った。どこか冷たい印象で自分とジャックのことにしか興味のないフランというのはこのあたりで完全になくなったような気がした。

そして、バドの家に招待されたこの日以降フランはさらに変化を遂げる。子供をほしくないと思っていた二人の間に子供ができ、フランの見た目も大きく変わる。仕事を辞めてしまい、長い髪を切り、ブクブクと太っていくフランは以前の姿など見る影もない。それどころか、わたしはこの姿からバドの妻であるオーラを想像してしまう。必要ないと思っていたものに触れることによって、なぜかそのものに自ら近づいていっているような気がした。もしかしてフランは心のどこかで以前のような生活は捨てたいと思っていたのだろうか。その人にはその人の生き方があるのに他の物を羨んだりしてしまうことによって変化が生まれることがあるように思う。そしてこの羽根という小説のように必ずしもいい方向に変化していくばかりではないのだということが分かった。



Raymond Carver “FEATHERS”における子どもの役割

渡邉（わたなべ）　秀聡（ひでさと）

対照的な二組の夫婦

この小説は二組の夫婦を中心に内容が展開されている。主人公のジャックと妻のフラン。二人の間には子どもはおらず、物語の冒頭部分では子どもを望んでもいなかった。ジャックは欲しくないものの筆頭に子どもを挙げている。それくらい子どもは必要なかったのだ。彼にとっての一番は妻である。特に妻の髪に強い愛着を持っている。小説には「私がその髪をすごく気に入っていることを彼女（フラン）は承知している。私はその髪にぞっこん参っているのだ。私は彼女に、君に惚れているのはその髪のせいだよと言う。髪を切っちまったらもう君のことを愛さなくなるかもしれないぜ、と。」上記のようにジャックはこだわりが非常に強い。そして、フランの髪をこよなく愛しているのは伝わったが、それがなくなると本当に妻を愛さなくなるのか、この時点ではにわかに信じがたい。

次に夫バドと妻オーラ夫妻についてだ。この夫婦も変わったものに愛着を持っていた。花瓶の隣に歯形を飾っておりジャックがこれを見たときには「それはこの世でこれほどぐしゃぐしゃな並びの悪い歯形はないと思えるような代物だった。そのおぞましい代物には唇もなく、顎もなく、黄色くて分厚い歯茎に似せた何かの中に石膏の歯形がすっぽりと埋め込まれているだけだった。」と描写されている。ジャックとフランの二人は描写通り薄気味悪く歯形を見ていたことだろう。しかし、バドとオーラ夫妻は違う。特にオーラはその歯型を見ると夫バドに対して感謝の気持ちでいっぱいになると書かれている。

このような描写から、どちらの夫婦にもそれぞれお互いが納得のいく形で特殊な愛着を持ち合わせていることがうかがい知れる。そして、この愛着はお互いの夫婦間では到底理解できるものではない。すでにジャック夫妻とバド夫妻の間には溝が生じているのだろうか。

ジャックの子ども嫌い

さらにこの夫婦間に究極の価値観の相違を生むきっかけとなる赤ちゃんハロルドが登場する。ハロルドを見たジャックは「それは誰が何といおうと、これまで私が見たうちでいちばん不細工な赤ん坊だった。あまり醜いので、私は口をきくこともできなかった。」という印象を持っており、このあとにもハロルドを蔑む描写が続いている。世間一般的には赤ちゃんとは純粋無垢でかわいいものだと思われているだろう。何の罪もないハロルドをここまで侮辱する必要がどこにあるのか。ジャックには赤ちゃんが嫌いになったエピソードやトラウマは存在しない。無条件でハロルドを嫌っているのだ。それはなぜだろうか。ジャックにとっては妻と二人きりで暮らすことが幸せなのだ。二人で映画を見に行ったり家でテレビを見るのが好きなのだ。

それでは子どもができるとジャックの理想とする生活はどうなるだろうか。子どもがいると妻と二人きりの生活は脅かされるだろう。それ以上にフランは子どもに付きっ切りになってジャックのことは二の次になってしまうのではないだろうか。ジャックがハロルドを見て抱いた第一印象は露骨に敵

意をむき出しにした大人気ない態度であるように思う。しかし、これはジャックにとっては幸せな日常生活を脅かすものに対する本能的な防衛反応だったのではないか。

ハロルドの影響力

ハロルドがジャック夫妻に残した影響は計り知れない。良くも悪くもジャックは子どもが頭から離れなくなり、フランの一言もあって子どもを持つようになった。あれだけ子ども嫌いだったジャックがである。怖いもの見たさという興味があったのかもしれない。ハロルドを溺愛するバドとオーラを見て、ジャックの心が揺らいだのかもしれない。

結果的にバドの家を訪れた際に抱いたジャックの防衛本能は正しかった。かつての夫婦の形は失われ、ジャックは抜け殻のようになってしまった。フランもその夜の出来事を後悔しており、バド夫婦や孔雀に対して恨み言に近い言葉を放っている。

最後に振り返って

この小説は「私は〜。」とジャックの視点で語られているため、ある意味話題は彼の意志が反映されているのではないか。つまりジャックが話したくない話題については多く語られていない。それはジャックの子どもについて強く見受けられる。「うちの子どもはずる賢い」以外の描写が見当たらないのである。話題に挙げる必要がないほど、ジャックは子どもに関心がない。子どもの存在をなかったことにしたいくらいジャックとフランは以前の姿とは変わり果てているように感じた。

レイモンド・カーヴァー「羽根」に隠された工夫

尾方　詩穂

作品の中のクジャクの存在

私は、レイモンド・カーヴァーの「羽根」を読んだとき、主人公の友人であるバドとその妻であるオーラが飼っているジョーイという名前のクジャクの存在が気になりました。どういう場面で登場するのかに視点を置いて読み進めると、とてもおもしろいです。

主人公ジャックの妻フランはバド夫婦の家を訪れることにあまり乗り気ではなかったのですが、訪れることになります。そしてバド夫婦の家に着くと、何かの叫び声のような声が聞こえてきて、その正体はクジャクでした。物語で重要となるバド夫婦に会うよりも先にクジャクと出会うということが、クジャクの重要性を表しているのかなと思います。また、クジャクはジャック夫婦を睨んだり叫んだりして、第一印象は良くありません。このことから悪いことを予期するきっかけになっていると思います。次に本文の中で、“The peacock scuttled ahead of us, then hopped onto the porch when Bud opened the door. It was trying to get inside the house.”と書かれており、ジャック夫婦がバド夫婦の家に入るのを防ごうとしているように感じました。

物語全体にクジャクが登場すると思いきや、ジャック夫婦とバド夫婦が食事を共にする場面にはクジャクは全く登場しません。ジャック夫婦の関係性を変えることに関係のない場面だからだと考えます。そして、食事が終わる頃に再び登場します。“We finished what was on our plates. Then we heard that damn peacock again.”と書かれており、食事が終わり、バド夫婦の赤ん坊と対面することになるであろうタイミングでクジャクは落ち着かなくなってきます。そして、対面したときにさらに落ち着きがなくなり、家の中に入ってきます。クジャクはジャック夫婦を睨んだり、じろじろ見たりします。この赤ん坊との対面で、ジャック夫婦の子供を持つことへの考えが変わり、生活が大きく変わることになります。ジャック夫婦のもとに子供が誕生して数年後、夫婦の関係が悪化した頃には、バド夫婦のところにクジャクはいません。このことを考えるとクジャクの存在というのはジャック夫婦の関係を変えるきっかけになる時だけ存在していたように思います。

題名に「羽根」とあり、ジャック夫婦が帰る際にプレゼントした羽根が重要なものなのかなと思っていましたが、クジャクの動きを観察していると、羽根よりもクジャクの存在の方が大きく関わっているのかなと思いました。

また、なぜクジャクを使用したのかも気になりました。クジャクがどんな意味を持つのかを調べてみました。クジャクは「地球上に存在する鳳凰」として、幸福や富を表すものだとされており、オスとメスが並んでいると更に、夫婦円満を表すようです。確かにバド夫婦は仲良しで幸せに暮らしています。しかし、クジャクがきっかけでジャック夫婦の関係が悪くなったことを考えると、幸せの象徴であるクジャクの働きは何なんだろうと考えさせられます。一筋縄ではいかないところがこの作品の魅力だと思いました。

作品の中の五感

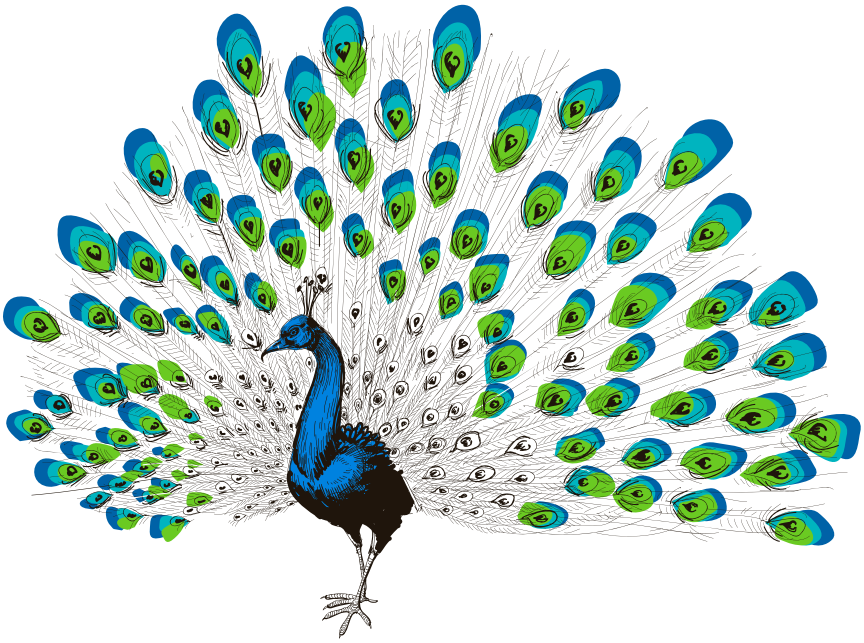
もう一つ、この作品を読んでいる時に感じたのが、五感を刺激する表現が多かったことです。視覚が表現されることは多いと思いますが、この作品では特に聴覚と味覚が多く表現されていました。聴覚ではクジャクの鳴き声がメインですが、赤ん坊の泣き声も表現されています。クジャクの鳴き声は、耳ざわりや奇妙など様々な表現がされています。また、赤ん坊の泣き声は、フランが赤ん坊に会いたいと思っている頃に聞こえてきます。味覚については、この作品では食事の場面が他の作品よりも詳しく描写されていると感じました。一つ一つの動きが丁寧に表現されています。また、フランが作ったパンの匂いが良い匂いという点で臭覚が登場しています。

小説には五感が必要だとは思っていましたが、こんなに多く描写されている作品は初めてでした。この作品を読んでいると、自分がまるで作品に入り込んだ気持ちになりました。五感の描写によって、実在している夫婦の普段の生活が描かれているような、リアルを感じることができました。

価値観の違い

この作品は完全に二組の夫婦だけで話が展開されています。そして、その二組の夫婦は対称的だと言えるほど価値観が異なっています。ジャック夫婦は初め、二人とも同じ考えを持っていましたが、バド夫婦に会って以来、二人の考えが異なり、最悪の結果を導くこととなります。どちらの夫婦の価値観も間違ってはいませんが、勢いで考えを変えてしまうのはいけないんだなと感じました。

作品としては珍しいなと思うほど、終わり方が残念ですが、予想に反するところがとても魅力的だなと思いました。最後までわくわくしながら作品を楽しむことができました。この作品には様々な工夫がされているように感じました。工夫を楽しみながら読むことは私にとっては新鮮で、楽しく読むことができました。



「東京タワー」

岡　　杏菜

「東京タワー」。これは江國香織という日本人作家が書いた小説である。収入も生活も安定した夫をもつ詩史と父の仕事で出会い、恋愛関係になった大学生の透。そして透の親友で、女子大生の彼女がいながらも人妻の喜美子と関係をもつ耕二。この２人の大学生の恋の物語である。

私は小説をよく読む。しかも推理小説や、最後にどんでん返しのあるといった内容の小説を読むことが大半である。恋愛小説はあまり好んで読まない。しかし恋愛小説としか言いようのないこの小説が私の一番好きな小説である。

言ってしまえばこの物語は２人の大学生と夫がいる女性、つまり人妻との不倫について書かれたものである。最近は不倫を題材とした小説やドラマが溢れている中、私がこの小説になぜここまで惹かれたかについて書いていきたい。

私がこの小説に惹かれた理由、それは著者の江國香織の書く言葉である。透は依存していると言っていいほど詩史のことが好きである。ずっと詩史のことを考えているし、詩史が透の全てであると言っても過言ではない。そんな骨ごと詩史に恋をしている透の気持ちを端的に、しかし美しく表す言葉がこの小説にはたくさん散りばめられている。

そんなたくさん散りばめられている言葉の中から私が一番感銘を受けた言葉を紹介しようと思う。
「恋はするものじゃなく、おちるものだ。透はそれを、詩史に教わった。いったんおちたが最後、浮上は困難だということも。」
「恋はするものじゃなく、おちるものだ。」これは詩史に恋をする透の全てを端的に、しかも美しく表したものであると私は思う。透は「詩史といるとき、その外の世界はまるで異質なものだった。」と言うくらい、詩史が透の全てであった。詩史と一緒にいられる時間、いられない時間までも生活の全てが詩史でできていた。
「いったん落ちたが最後、浮上は困難だということも。」透は詩史と不倫をしているし、社会的にいいことをしているとは言えないが、そんなことはお構いなしに詩史にのめり込んでしまう。周りが見えなくなってしまうくらい、詩史と出会ってからの時間が増えるごとにどんどん詩史にのめり込んでしまう。そんな透のことをこれ以上に表すことのできる言葉は他にないだろう。

私はこの小説を読んで言葉の素晴らしさを感じた。言葉の組み合わせは何通りも無限にあるが、美しく、心に響く言葉の組み合わせを作るのはとても難しい。私も江國香織のように短く、しかし綺麗な言葉で物事を表現できるようになりたいとおもう。